

## 就職活動を振り返って 『軸となる専門性を持って視野を広げる』

株式会社大林組建築事業部プロジェクト推進第二部  
兼 営業総本部スマートシティ推進室事業開発部  
森川 潤 (A63)



私は、2017年に博士課程前期課程（工学研究科建築学 専攻）を修了し、(株)大林組に入社しました。現在は、大阪駅前の再開発等に携わっております。この度は、KTC 機関誌への寄稿の機会を頂き、有難うございます。僭越ではございますが、私が大学時代の出会いの中で学び、今の自分に繋がっていることについて、述べさせて頂きたいと思います。そして、それらがこれから就職活動を進められる学生の皆様の今後のキャリア形成の何らかのご参考になれば幸甚です。

まず初めに、この機会にお伝えしたい言葉をまとめますと、月並みな表現になってしまいますが、就職活動時にこれまでの経験を振り返り、また、現在の仕事の中でも意識し、大切にしていることは、「軸となる専門性を持ちつつ、視野を広げること」、そして、そのためには「分野を問わず出会いを大切に、学びを得ること」です。この考え方は、自分自身の現在地を知り、進路選択をする上では判断基準にもなるものと思います。工学系の勉強・研究をされている皆様であれば、ご自身の学科や専攻という専門性の中でそれぞれのテーマを追求する日々を送っておられると思いますので、ここでは、それと同時に視野を

広げることの重要性を感じた大学時代の3つの出会いと学びを中心にお伝えしたいと思います。

本題に入る前に、私の職業をもう少し補足させて頂きます。大林組とは、ゼネコンと呼ばれる会社の一つで、建物を設計し、施工する会社です。その会社の中で私が志望したのは、設計部門でも施工部門でもない、都市開発部門になります。ここでは、設計業務が始まる前に、この敷地には、どのような建物がふさわしいのかを考え、構想を立案し、その実現に向けてあらゆるステークホルダーと事業を進める業務を行います。ゼネコンの中では人数の少ない部署ですが、大学入学当初は設計者を目指していた私が、なぜこの職種を志すに至ったのか、その経緯に沿って話を進めさせて頂きます。

まず、1つ目は、大学入学年である2011年に起こった東日本大震災へのボランティア活動です。私自身が幼少期に阪神淡路大震災を経験していたこともあり、何か役に立つことができればという単純な思いで、当時、大学側が募集していたボランティア派遣に応募しました。東北の現地では、各地から被災者が転居していた仮設住居をまわり、コミュニティ支援を行いました。そこで被災者一人一人と会話し、困りごとを聞いたりしながら、被災者間の関係づくりのお手伝いをしていた中で感じたこととしては、仮設住宅は拠点ごとに数十戸がまとめて建てられていましたが、家族や近隣住民との繋がりが途絶えしまった被災者にとって、それは単なる住居に過ぎず、いくつ住居が並んでいても、それは街では無くなってしまっているということでした。その体験は、ハードとしての建物だけでは街は出来ず、そこで暮らす人々の生活にまで目を向けて建築は作られなければいけないという問題意識にも繋がりました。

2つ目は、屋外空間を中心に設計を行うランドスケープデザインの先生との出会いです。大学時代の建築学科では、与えられた敷地に自分の作りたい空間を表現できることに楽しさを覚え、設計課題に没頭する日々を送っていました。そこでは、敷地の中にどのような線を引くかに躍起になってしまってい

た自分がいましたが、当時、そのランドスケープの先生からは、その敷地が都市の地形や自然、歴史、人の流れ等の中でどのように位置しているのかを考え、敷地の中ではなく、外との関係性に目を向けることの重要性を強く説かれました。その先生には、設計課題やコンペ、就職活動など、あらゆる場面で意見を貰いましたが、その先生との出会いの中で得た学びは、建物を作る上で、空間設計に入る前に、街との関係を紐解きながら、その敷地に求められる建物を構想する仕事への興味をより強くすることに大きく影響したと思います。

3つ目は、個別指導塾のアルバイト先の社員さんで、元々総合商社で都市開発の仕事をされていた方との出会いです。その方からは、前職で携わっておられた商業施設やタワーマンションの開発の話色々伺い、都市開発の仕事の面白さを教えて頂いたということもありますが、当時、取り組んでいた卒業設計にも多くの意見やツッコミを貰っていました。それは、都市開発の本業の視点から、どうやって集客するのかであるとか、どうやって採算を取るのかなど、当時の私にとっては疎かにしてしまっていた観点でした。今となっては、建物の実現性や運用開始後の持続可能性を高める上で、至極当然の話ではありますが、建築学科で建築という専門性を追求するだけでは抜け落ちてしまう観点であり、大学時代にこの観点での指摘を貰っていたことは、建物の見方を鍛える上でも非常に有意義だったと思います。

上記で述べた3つの出会いと学びは、建築の専門性を育む上で、専門性に捉われず、あらゆる分野の人との出会いを大切にしてきたからこそ得られたものだと考えています。同じ分野の人であっても、これまでの経験が違えば、当然考え方も違いますので、そういう意味では、就職活動もOB訪問や説明会をはじめ、様々な人との出会いの機会になるかと思います。また、これまでの学生生活で、人それぞれ多様な経験をされているかと思いますが、是非、これまでの出会いを振り返るとともに、視野を広げる機会を作って頂けると良いのではないかと思います。

最後になりますが、このような拙い文章にお付き合い頂き、有難うございます。今後、どこかの機会でお会いできることを楽しみにしております。